In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	堀辰雄における「万葉小説」への憧憬：「(花の話・詩経)」から「(出帆)」に至るまで
Author	劉, 娟
Citation	文学史研究. 60 巻, p.38-55.
Issue Date	2020-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

（『文学史研究』60号　2020. 3）

堀辰雄における「万葉小説」への憧憬
――「（花の話・詩経）」から「（出帆）」に至るまで――

劉　娟

一　まえがき

堀辰雄（明治37年12月～昭和28年5月　以下堀と称する）は西洋の「小説（ロマン）」を目指して門出した作家である。帝国大学時代は、国文学科に在籍していたが、もっぱらフランス文学を耽読し（小谷桓「堀辰雄と折口信夫―私記風に見た堀辰雄の一面―」・『国文学』昭和38年7月）、あまりの西洋かぶれで、師の芥川龍之介から、「あれ以上ハイカラそのものを目的にするのは君の修業の上には危険だ」（芥川龍之介　大正14年7月21日　堀宛書簡）と警告されたことさえある。しかし、堀は西洋文学に傾倒する一面を持ちながら、晩年いわゆる「古典回帰」の時期には、国文学者・民俗学者として知られる折口信夫の学問に強い関心を示し、折口学を生かした万葉小説を書こうとした。それだけにとどまらず、堀が中国古典にも親炙し始めていたと彼の身近な人々も語っている。

病床の堀辰雄は、じつにたくさん本を読む。（中略）彼の身辺にはこの二三年来、めざましい勢いで唐本仕立ての漢籍類がふえた。李長吉の詩巻、宋代の詞の集、乾隆版の歴朝名媛詩詞など、そうしたおびただしい藍色の帙の堆積はほとんど床の間を埋めつくして、壁間にかかげてあるフラ・アンジェリコの聖者の図や、ボッチチェリの聖母戴冠の図や、倉敷の美術館にあるグレコの「受胎告知」のみごとな大型の複製図など、奇妙なコントラストを形づくっている。

神西清「高原の人」（『新女苑』昭和25年12月）

堀多恵子夫人が編纂した堀蔵書目録（筑摩全集別巻二）を見ると、中国関係の蔵書は一六〇種以上に及んでいる（A―（三）及びA―（四）という二つの分類に集中）。この状況からも晩年の堀の中国古典への関心がいかに深いものであったかがわかる。しかし、堀の中国古典への傾倒が確かなものであるにも関わらず、その関心は、彼の作品の中で、エッセイ「一琴一硯の品」（『甲鳥』昭和16年11月　後に「我思古人」と改題）以外にその痕跡を見出し難い。ただし、次の五つの未発表の中国古典ノートが遺されていることは注目すべきである。

①「支那古詩㈠」
②「支那古詩㈡」
③「(杜甫訳詩)」
④「(支那古詩抄)」
⑤「(花の話・詩経)」

(注:『堀辰雄全集　第七巻(下)』(筑摩書房　昭和55年6月)を参照。①～⑤の番号は、本稿の説明の便宜上、私に付けたものである。)

堀が中国古典を大量に繙いた、そのきっかけは何だったのだろうか。堀が必死に中国古典に関する知識を追い求めたことには、いかなる意図を読み取ることができるか。本稿では、⑤「(花の話・詩経)」(「詩経」部分の内容のみ、以下「詩経」ノートと称する)に検討を加え、この課題の考察を試みたい。

二　堀における『詩経』の受容――その一素描として

1　「詩経」ノートの概要

「詩経」ノートをめぐって今まで次のような研究が行われてきた。内山知也氏は「堀辰雄の《支那趣味》」(『日本近代文学』14号　昭和46年5月)でノートの典拠に触れた。岡本文子氏はさらにノート成立のきっかけおよび年代を推定したうえで、堀の中国的なものへの接近過程について、資料を以て年代順に検討した。最後に、ノートが完成されていないことから「意図の放擲」であると推測し、堀の中国古典受容は、一種のディレッタンティズムに収束されたという結論を導いた(「堀辰雄文学に於ける中国古典受容の形態について――「詩経」ノオトを中心に――」(『和洋国文研究』昭和61年3月))。

本稿は以上の論を踏まえたうえで、「詩経」ノートを、堀の『詩経』関係の手沢本にある書込みメモと合わせて分析し、堀における『詩経』の受容を再検討することを目的とする。

「(花の話・詩経)」は中版ノートに横書きされたものである。三部構造になっており、前半(3～16頁)は折口信夫の「花の話」(国学院大学郷土研究会例会講演筆記　昭和3年6月)からの抜粋メモと、その続きに、英文と和文の混じった英詩関係のものが記されている(19～27頁)。後半(77～29頁　後ろから前へ)は『詩経』の詩33篇の摘記詩句と、それに伴うフランス語訳および日本語の解説メモから構成されている。

「(花の話・詩経)」にある「(詩経)」の部分は、グラネー(Marcel Granet　1884～1940年)の『支那古代の祭礼と歌謡』(*Fêtes et chansons anciennes de la Chine* 1919年;内田智雄訳は昭和13年2月　弘文堂書房初版)の前半内容を摘記したものと、邦訳された時点で「割愛」された『詩経』フランス語訳(クーヴラー〈Séraphin Couvreur〉の *Cheu King*〈1896年〉)からなる。

ノートの冒頭には以下のような内容が記されている。

1)歌謡の原始的な意義の闡明。
詩経(Le Livre des Odes 或は Le Livre des Vers)
第一部　国風(国別に分類せられた地方的な歌謡の編纂)

＊Giles; A History of Chinese Literature.
＊Grube; Geschichte der Chinesischen Literatur
＊Laloy: Les Chants des Royaumes
(M.R.F. 1909)（傍線堀）

冒頭にある「歌謡の原始的な意義の闡明」というのは、グラネーが『支那古代の祭礼と歌謡』でしばしば強調していた論点であり、いわゆる「第一編　詩経の恋愛歌」の中心論旨だと言える。グラネーは「歌謡の原始的な意義」を「闡明」するために、『詩経』の「国風」の部分を研究対象として取り上げた。彼によると、「国風は恋愛歌であつて、忌憚なき感情が吐露されて居る」。＊印の以下の三冊の参考書は、グラネー著で提起された『詩経』関係の書籍である（ちなみに、堀の蔵書目録（筑摩書房版『堀辰雄全集　別巻（二）』所収）に最初の二冊が見られる）。

以上のような冒頭内容に続き、「桃夭」から「揚之水」までの33篇（「行露」という詩は題目のみ記載）の詩経原詩およびそのフランス語訳、詩に関する説明文がノートに記されている。その最初の詩「桃夭」を引用する。

桃夭（T'ao Iao）

1）桃之夭夭。灼灼其華。之子于歸。宜其室家。

Le pêcher est jeune et beau; ses fleurs sont brillantes.
Ces jeunes filles vont célébrer leurs noces chez leurs fiancés;
Elles établiront l'ordre le plus parfait dans leurs appartements et dans toute la maison.

2）桃之夭夭。有賁（フン）其實。

(ses fruits sont nombreux)

之子于歸。宜其家室。

3）桃之夭夭。其葉蓁蓁。（son feuillage et luxuriant）之子于歸。宜其家人。（elles établiront l'ordre le plus parfait parmi les personnes de leurs maisons）

○婚約歌。植物成長の主題。

（注：傍線などの記号はすべて堀による。）

この「桃夭」に次いで、似たような内容の摘記メモが続けられている。

ノートの典拠『支那古代の祭礼と歌謡』では、『詩経』の国風歌を「田園的な主題」と「村落の恋愛」、「山川の歌謡」の三部に分けて説明している。「詩経」ノートの内容は、その「田園的な主題」（20篇）と「村落の恋愛」（前半11篇）から抜書きしたものである。その続きとして存在するはずの「村落の恋愛」（後半10篇）および「山川の歌謡」（23篇）は見られない。

このような現象に対し、先行研究では放棄説だと捉えられている（岡本文子「堀辰雄文学に於ける中国古典受容の形態について―「詩経」ノオトを中心に―」前出）。しかし、この言説をそのまま受入れることはひとまず保留しなければならないと思われる。

前に述べたように、「（花の話・詩経）」は三部構造となっている。「花の話」及び英詩関係のものはノートの3頁から27頁におよんでいる。「詩経」の部分の内容は、ノートの後ろから前へ遡って書き込んでいるかたちになっている。77頁から始まり、29頁で途絶えている。

すなわち、前の部分の内容（27頁まで）との間に僅かに1頁しか空いていない。ここで、一つの予測がつくのではないだろうか。つまり、堀が最後の詩「揚之水」をメモしたところで、ノートの頁が尽きてしまったので、そのためこの「詩経」ノートが残欠にみえるものにしかならなかったのだろう。

しかし、その途絶えてしまった『詩経』の学習について、続けてほかの資料から探ることが可能である。

2　蔵書への書込み

堀の蔵書目録（堀辰雄文学記念館ホームページ掲載、以下同）のうち、『詩経』関係のものは以下のようになる。

①岡田正三訳『詩経』（昭和11・1　第一書房）
（注：筑摩全集蔵書目録の方では昭和8年（初版）だと記載。）
②根本通徳『詩経講義　上・下巻』（明治44　博文館）
③謝晋青『詩経之女性的研究』（昭和9・10　商務印書館）
④目加田誠『詩経』（東洋思想叢書8）（昭和18・3　日本評論社）
⑤『詩経集註　全五冊』（江戸書林　出版年未記載）
⑥周公翼纂輯『毛詩品物図改　全三冊』
（平安杏林軒　浪華五車堂　出版年未記載）

蔵書①及び④には、堀の書込みメモなどが残っている。次に以上の二冊の手沢本（主に蔵書①）にあるメモ内容を参照しながら、堀における『詩経』の学習を跡付けることを試みる。

堀の『詩経』学習は、「詩経」ノートのほか、主に蔵書①にその痕跡をとどめている。蔵書①は『詩経』の「国風篇」の訳本で、原詩の下にその口語訳、それに簡単な注釈が付けられている書物である。この堀蔵書には、『支那古代の祭礼と歌謡』、クーヴラーの『詩経』フランス語訳、さらに蔵書④からの摘記内容が見られる。

堀蔵書①の見返しに、以下のような内容が見られる。

国風の大部分を形成する恋愛詩は、民謡の古い集積（『支那古代の祭礼と歌謡』の場合は、「集積」が「集蓄 fonds」となっている―筆者注）からひき出されたもので、かゝる歌謡は伝統的な即吟競争の際に発想せられた詩の主題にもとづいて作成せられたものである。即ち即吟競争とは、古代農民社会の季節祭の時、競争が喧嘩せしめた青年男女の交互合唱のことである。
（グラネー）　（傍線引用者）

この書き込み内容は、『支那古代の祭礼と歌謡』の中心論旨であり、本の最後の一章「結論」にある内容である。グラネーによると、『詩経』国風の恋愛歌は、「即吟競争」に由来するらしい。堀がこの文句を蔵書①の巻頭に書き込んでいるということは、グラネーのこの観点を非常に重要視していたことを示唆する。さらに言うと、彼は『詩経』国風の恋愛歌が「即吟競争」の歌であるという先入観を抱きながら、蔵書①の学習に取り組んでいたことが考えられる。

次の蔵書メモと合せて見ていくとさらに明白になる。

路の露　×行露
☆恋愛歌競争
男　厭浥行露　豈不夙夜
女　謂行多露
男　誰謂雀無角　何以穿我屋　誰謂女無家　何以速我獄
女　雖速我獄　室家不足
男　誰謂鼠無牙　何以穿我墉　誰謂女無家　何以速我訟
女　雖速我訟　亦不女從

男　Les Chemins ont de la rosée : Pourquoi donc ni matin ni soir?
女　Les chemins ont trop de rosée!
男　Qui dit qu'un moineau est sans bec? Comment percerait-il mon toit?
Qui dit que tu es sans mari? Comment t'en prendrais-tu à moi?
女　Bien que tu t'en prennes à moi, Le mariage n'est point fait!
男　Qui dit qu'un rat n'a pas de dents? Comment percerait-il mon mur?
Qui dit que tu es sans mari? Comment t'en prendrais-tu à moi?
女　Bien que tu t'en prennes à moi, Quand même je ne te suis pas!

若者が娘に春の祭に一緒に行かないかと誘ふ／娘はいやだと答へる。あまり時刻が遅すぎるからだと／いふ。—若者は娘を説き伏せようと議論す／る。—娘は再び拒絶する。—若者は新しいモチーフ／で同じ議論を再びする　—娘は又これを拒絶する

（注：堀のメモにあたる内容を太字にゴシックで表示している。堀が改行した箇所を「／」で表示する。）

堀は蔵書①の「行露」（『路の露』）という詩に、夥しいメモを書込んでいる。その書込み内容はすべて『支那古代の祭礼と歌謡』にある「附録（一）」の部分を参照したものである。グラネーは「行露」という詩が祭礼の場のおける男女の即吟競争歌の典型だと捉えている。堀はグラネーの考えに従い、この詩の内容をわざわざ男女のセリフに分けて読んでいたことが明白である。

グラネーが『詩経』国風歌によって実証した中国古代歌謡の「即吟競争」起原説を、堀がいかに真剣に取り入れていたかを以上の蔵書メモからでも垣間見ることができる。似たようなメモは、「漢廣」という詩にもある。堀はこの詩について、「各章末の四句は恐らく齊唱されたものか」と述べている。このメモ内容はこれから触れていく蔵書④からの摘記内容である。

堀における蔵書④の学習は、「三百篇の本質」（国風・小雅・大雅・頌）

にある「国風」という部分に収斂されていることが、蔵書④に残っている堀メモ（蔵書④にある「国風」の紹介が9～78頁で行われ、堀は9～73頁の詩の題目に傍線をつけている。）から分かる。

蔵書④では『詩経』国風篇が五つの部類にわけて紹介されている。各部類ごとに掲げた詩の題目を次に挙げる。

▼『愛恋の歌』

桑中　丘中有麻　**有女同車**　漢廣　有狐　蘀兮　褰裳

溱洧　木瓜　摽有梅　静女　野有蔓草　鶏鳴　東門之池

東門之楊　綢繆　遵大路　狡童　行露　終風　谷風　氓

伯兮　君子于役　中谷有蓷　殷其雷　月出　澤陂　蒹葭

▼『行役の歌』

揚之水　擊鼓　陟岵　鴇羽　東山

▼『祝頌の歌』

甘棠　樛木　螽斯　淇澳　緇衣　終南　鳲鳩　麟之趾　猗嗟

碩人　君子偕老　桃夭　鵲巣　何彼穠矣　采蘩　采蘋

大叔于田　還　盧令　駟驖　無衣

▼『生活の艱難を訴える歌』

碩鼠　北門　權輿　葛屨　伐檀　葛藟　杕杜

▼『故事ある歌』

新台　二子乘舟　株林　南山　敝笱　定之方中　黄鳥　載馳

鴟鴞　牆有茨　柏舟　旄邱　渭陽　燕燕　黍離

注　・蔵書④において原詩を取上げて詳しく紹介している詩はゴシックに太字で表示（例「**無衣**」）、それ以外は内容を掲げず題目のみを取上げた詩である。

前述のように、蔵書①には蔵書④の内容に関わる書込みメモが見られる。それらのメモ内容は上掲の資料にある文字囲みの詩（例「摽有梅」）から取られている。堀が蔵書①においてメモをした詩が合わせて45篇ある。そのうち、蔵書④に拠るものが35篇見られる。この数字だけからでも、堀が蔵書④国風歌の紹介内容をいかに耽読していたかが推測できる。

一方、蔵書①にある蔵書④の学習メモ（文字囲みの詩にかかわる）から、堀における『詩経』国風の学習がほとんど最初の二つの部類「愛恋の歌」（29篇のうち23篇がメモされている）及び「行役の歌」（5篇のうちに4篇がメモされている）に集中していることが言えるであろう。「行役の歌」の分類には詩4篇しか入っていない。が、「愛恋の歌」に収録されている「伯兮」「君子于役」という2篇の詩（二重傍線で表示）は、行役に行った男を偲ぶ歌で、行役の主題として読み取ることが可能である。その上、「愛恋の歌」「行役の歌」に続いて、「祝頌の歌」の部類では、合計21篇の詩のうち堀がメモをとったのが6篇ある。しかし、そのうち、「桃夭」、「鵲巣」、「何彼穠矣」など婚姻祝福を主題としたものの中には、「愛恋の歌」と不可分な関連があると考えられる。

3　「詩経」ノートの成立（きっかけと時期）

これまでの考察で、堀における『詩経』受容像が浮彫りになってきたのではないか。彼は『詩経』のフランス語訳（クーヴラー訳）とともに、日本語の口語訳（蔵書①）を参照しながら、歌謡の原始的なかた

ちを「即吟競争」だと捉えたうえで、国風にある恋愛・行役歌に注目していた。

さらに、堀が真剣に取り組んでいたグラネー著および目加田誠著（蔵書④）においては、『詩経』研究における基本的な視点が一致しているところに留意したい。つまり、ノートの典拠『支那古代の祭礼と歌謡』は、『詩経』の民俗学的な解釈の先鞭をつけた書物である。その一方、蔵書④については、本が再版される際に著者が語ったように、『詩経』を儒教の経典としてではなく、「純粋に古代の歌謡文学として扱ったのは」日本ではこれが「初めての試みである」（平成3年1月　講談社学術文庫本版）。

両者とも従来の儒教経典とされてきた『詩経』を、民俗信仰に根ざす古代歌謡として解読しようとする。堀が当時では斬新な『詩経』研究視点――フォークロア的な解読を求めようとした背景には、「文学の信仰起原説」（折口信夫「国文学の発生（第四稿）」・『日本文学講座』昭和2年）を唱えた折口学への傾倒という大前提があったことが言える。堀の蔵書目録には昭和14年版の『支那古代の祭礼と歌謡』が入っている。昭和14年以降は、堀が「折口の国文学への本格的な接近」（中島昭「折口信夫受容についての素描」・『堀辰雄――昭和十年代の文学』平成4年12月　リーベル出版）期を迎え、折口学への関心が旺盛になっている時期にもなる。堀はノートの題目を最初から「Duiniser/Elegien（ドゥイノの悲歌―筆者注）・古代研究／をりくち」にし、折口の「花の話」からの摘記メモを一緒にこのノートに書き込んだことが最も有力な根拠になる。

そのうえ、ノート成立のきっかけを考えると、先行研究（岡本文子「堀辰雄文学に於ける中国古典受容の形態について―「詩経」ノオトを中心に―」前出）では、堀の以下の発言に基づきながら、折口学の影響が取り上げられている。

> リルケがその畢生の大作、「ドゥイノ悲歌」を歌ひはじめるにあたつて、まづ胸中に絶えずおもつてゐたことの一つは（中略）詩歌の発生もまたあらゆる神に似た夭折者たちを哭し、その魂を鎮めんがためであつたといふ考へではなかつたでありませうか。唯、そのやうな希臘人たち乃至リルケの考へ方が私達の素朴な祖先たちのそれとやや趣を異にするのは、（中略）私達の祖先らは、人の魂といふものをどこまでも外在的なものと素朴に考へて居つたやうであります。（中略）
>
> さういふいくぶんの相違はあるやうでありますが、少くとも詩歌とか音楽とかの源泉についての考へ方が、おのづから東西軌を一つにしてゐるらしいことは、只今の僕には大へん有難い発見であるといはなければなりません。
>
> 堀辰雄「伊勢物語など」（『文藝』第8巻第6号　昭和15年6月）
>
> （傍線引用者）

岡本文子氏は、ノートの冒頭に掲げられた「歌謡の原始的な意味の闡明」を、以上の堀の主張と結び付け、ノートの成立意図を、詩歌の発生メカニズムが「東西軌を一つにしてゐる」ことへの究明であると指摘している。さらに、ノートの成立年代は以上の意図を反映する堀のエッセイ「伊勢物語など」の書かれた昭和15年前後であり、ノートの未完成の現象から、グラネー著をもって鎮魂要素を絡めとろうとし

た意図が失敗に終わったなどの結論を導いた。

引用文のリルケの「レクキエム」から折口の「鎮魂」説への出会い事件は、堀文学でしばしば語られていることである（「古墳」・『婦人公論』昭和18年3月）。従来の日本古来の「鎮魂」信仰についての研究（伴信友『鎮魂伝』弘化2年）では、人の魂は内在なもの（内から外へ憧れ出る）だと捉えていることに対し、折口は「外来魂（マナ）」の観点（魂が外から内へ付着する）を新しく提起した（「花の話」〈前出〉などに散見）。堀が唱えた「私達の祖先らは、人の魂というものをどこまでも外在的なものと素朴に考えて居った」ことは、明らかに折口の鎮魂説に根ざしている。

堀がノートの題目を最初から「Duiniser/Elegien（ドゥイノの悲歌—引用者注）・古代研究／をりくち」としたことを加えて考慮すると、前述の岡本氏の意図説は妥当性のないことでもなかろう。

もっとも、同ノートに入っている「花の話」の部分の典拠である折口「花の話」では、以下のような内容が見られる。

> ふゆは触れること、ふゆとふるとは同じ事である。ふゆは物を附加する事であるが、もとは物を分割する意味である。ふるはまな（外来魂）を人体に附加する事で、冬になると総てのものをきり替へるので、魂にも、外から来る威力ある魂を附加するのである。
>
> （中略）
>
> 魂を附加するのは、鎮魂祭である。此を魂（タマ）ふりと言ひ、その儀式が厳冬に行はれる。魂ふりはまなを内部に附加密著して了ふ事であるが、支那の鎮魂は内の魂を出さない様にする事である。此が変化して来て、時の変り目に、内在魂が発散するから、此を防ぐ為の魂を鎮める行事となつた。此がたましづめである。
>
> 折口信夫「花の話」（国学院大学郷土研究会例会講演筆記　昭和3年6月）
>
> （傍線折口、傍点引用者）

日本人の霊魂信仰の基礎が外来魂信仰にあるとする考えは、折口学説の根幹である。外在の魂を付着することは「**たまふり**」である。人の魂が内在的なものであるという考えは中国渡来の思想で、遊離しがちな内在の魂を鎮める行為を「**たましづめ**」という。「この二つが、だん〳〵信仰上の混乱を来して、外から魂を附著せしめる信仰と、内にある魂を、発散させないといふ意味とを含め」（「歌の発生及びその万葉集における展開」『現代短歌全集月報』昭和4年10～12月、昭和5年5～9月）ることになった。万葉の鎮魂には、すでにこのような二通りの意味があった。

「詩歌とか音楽とかの源泉」にレクイエム的要素のあることが、「東西軌を一つにしてゐる」ことを主張する堀は、民俗信仰に根ざした中国の古代歌謡『詩経』にも、「鎮魂」のイデーを見つけることができる。——堀の「レクキエム的」なものに対する一貫した関心の傾向から、そのような予測がつくことは何の不思議もないだろう。堀の関心の触手が中国に伸び、漢文化とゆかりの深い「たましづめ」の観点が強い牽引力を果たしたのではないかと考えられる。つまり、堀は歌謡の原始的な意義において東西を問わず鎮魂要素が捉えられるという予見を見出す前に、既に折口説から、漢文化である「たましづめ」の影響が、後になって日本古来の「たまふり」に及んだことを事前に把握していたのである。

「（花の話・詩経）」ノートはもともと東西にある鎮魂イデーを探求するためのノートとして用意されたことが推測できる。

「詩経」ノートの典拠『支那古代の祭礼と歌謡』には、鎮魂について言及した内容が全くないこともない。しかし、それはあくまでも一言くらいで浅く触れる（中国古代の「招魂」思想など）だけで、本全体の主流思想にはならない。これまで見てきたように、堀が残している『詩経』学習メモには鎮魂関係のものは一切見当たらない。そのような意味で、古代歌謡の鎮魂思想をグラネー著から絡めとろうとした堀の最初の意図は失敗に終わったと言えよう。堀が結局ノートの原題「Duiniser/Elegien・古代研究／をりくち」を抹消したことも、そのあたりに理由があったかもしれない。

しかし、それは『詩経』の学習そのものの「放棄」にはならないだろう。そのうえ、「伊勢物語など」のみを根拠にしてノートの成立時期を昭和15年前後だと推定することも少し躊躇しなければならない。

これまで見てきたように、蔵書①の学習メモには、昭和18年3月刊行の蔵書④の摘記メモが夥しく残っている。さらに、昭和20年2月12日加藤周一からの書簡には、「中村（中村真一郎―引用者注）に依頼しました詩経の佛訳を借して戴ければ幸甚です」とある。明らかに書簡にある「詩経の佛訳」はクーヴラーの *Chou King* である。従って、蔵書①にあるメモの成立年代は昭和18年3月より昭和20年2月あたりまでの間になる可能性が高いと考えられる。

昭和18年前半は、堀が連載物『大和路信濃路』（昭和18年1月～8月『婦人公論』）の取材のために盛んに旅に出る時期である（2月に志賀高原、4月に奈良、5月に京都）。後半は、7月から軽井沢に滞在し、主にリルケとプルウストに親しんだ（3月末に大山定一らとリルケの書簡集を訳す計画を立てた）。昭和19年になると、堀は3月から病臥し、出版がますます困難になる情勢のなか、「読書生活を送つて来るべき日のために力を養つて」（7月15日　中市弘宛）いた。彼の友人などに宛てた書簡には、「何を読んだともつかないやうな読み方」（12月28日 葛巻義敏宛）で「糞おちつきに本ばかり読んでゐ」（9月9日 川端康成宛）る一方、「いよいよ小説らしい小説を生涯のうちにすくなくとも一篇は書いておきたい」（7月26日 中市弘宛）と励んでいた。このような状態がこの年の最後まで続いた。翌年の昭和20年になると、病状が深刻化し、「ちょつと手の込んだ勉強」（8月27日　葛巻義敏宛）が難しくなる。

以上のことを考慮すると、堀の蔵書①にある書込みメモは昭和19年に残した可能性が高いだろう。一方、蔵書①のメモは「詩経」ノートに比べると、内容がより多岐にわたるものである。そのことから、ノートは蔵書①のメモの書かれた少し前に残したものではないかと思われる。さらに、ノートに題目しか記さなかった「行露」（『路の露』前出）という詩は、蔵書①において詳しく記録されていることなどから、両者の間にはむしろ何か一貫性のようなものが認められる。そのため、「詩経」ノートの成立時期は蔵書①のメモとはそれほど隔たっていない昭和19年頃と考えられる。

三　万葉小説へのアプローチ――東歌と『詩経』（国風歌）

堀が『詩経』をめぐって上述のような手の込んだ勉強をしてきた意図は何であったのか。

堀は『詩経』の学習に取り組むのと近い時期（昭和18年8月）に、以下のようなことを語っていた。

主　あの小説には、それからもう一つ、別の興味があつた。大伴家持だ。柳の花の飛びちつてゐる朱雀大路を、長安かなんぞの貴公子然として、毎日の日課に馬を乗りまはしてゐる兵部大輔の家持のすがたは何んともいへず愉しいし、又、藤原仲麻呂がその家持と支那文学の話などに打ち興じながら、いつか話題がちかごろ佛教に帰依した姪の郎女のうへに移つてゆく会話なども、いかにもいきいきとしてゐたな。

客　さういふところに作者の底力がひとりでに出てゐる。人間として大きな幅のある人だ。

堀辰雄「大和路・信濃路　死者の書」（『婦人公論』昭和18年8月）（傍線引用者）

折口の古代小説『死者の書』を一つの分水嶺として、堀は「折口の国文学への本格的な接近」（前節引用の中島昭氏論文）期を迎える。それ以降、『死者の書』を目指した万葉小説を営むことが、堀晩年の長年にわたる文学的抱負であった。『死者の書』が堀を魅了した理由には、「全篇、森厳なレクヰエム」や女主人公の気高い姿があるほか、この引用文では「もう一つ、別の興味」が語られる。それは小説に漂っている万葉時代の漢学趣味である。万葉小説を目指した堀は、そのような漢学的素養からもたらされた「底力」や「大きな幅」をいつか自分の作品にも、とひそかに決意しただろう。堀の中国古典への関心は、『死者の書』が上梓された翌年の「昭和十五年ころに至って急に強ま」（内山知也『堀辰雄　杜甫詩ノオト』昭和50年12月　木耳社）った。

『死者の書』によって誘われた古代小説への憧れは、堀の「万葉小説」を仕上げる意志を刺激した。それと同時に、中国古典への関心が急激に盛り上がることになる。堀が熱心に身につけようとした中国古典知識は、「万葉小説」のための下準備だと推断できよう。

堀のその大きな羽ばたきのための潜伏期間は実に長いものであった。『死者の書』が昭和14年1月から3月にかけて『日本評論』で連載されてから間もなく（5月）、堀は『死者の書』の舞台になる二上山を訪れる。昭和16年10月に、彼はいよいよ「万葉小説」を取材するために再び大和路に出る。しかし、堀が憧れていた「万葉小説」は結局挫折し、諦めて始めから勉強し直すことを決心する（堀辰雄「十月」・「婦人公論」昭和18年1～2月）。それ以降、昭和19年の冬から、再び「次の仕事（万葉もどきの小説）のことなどぼんやりと考へ」（12月28日　葛巻義敏宛書簡）出す。

しかし、堀が憧れていた「万葉小説」は結局実らず、彼の「万葉小説」へのアプローチのためのさまざまな努力の跡のみが残り、それらはいくつかのノート類を通して垣間見ることができる。それらのノートのうち、天平時代を背景にした防人小説「（出帆）」ノートがある。

この「（出帆）」に先立ち、比較的、初歩的な「（水のうへ）」ノートが見られる。さらに、万葉防人物語の準備として、万葉東歌の学習ノート「東歌」や「（万葉集抄　一）」（「東歌抄　万葉集巻十四」の内容がある）などが残されている。

一方、「（出帆）」および「（水のうへ）」では折口の民俗学が所々に取入れられ、「東歌」などのノートの場合も、折口関係著書を典拠にしていたことがあきらかである。(注1)

折口学に基づき、防人の心情を多く歌った万葉東歌をとり入れた小説を営むことを、堀は最初からねらっていたことが予測できる。

折口によると、「東歌は、巻十四と巻二十との両巻に記載せられてゐるが、前者の方が、稍古いものと見てよい。後者は、民謡から創作がゝつた境地に一歩踏み込んだ頃のもので、恐らく、大伴家持の採集したものであらう。謂はゆる防人（「九州の邊要の地を守る軍人」―折口）の歌である。」（「上世日本の文学」・堀蔵書『日本文学啓蒙』所収昭和25年2月朝日新聞社、似たような記述が堀蔵書『万葉集辞典』〈大正8年　文会堂書房〉にもある。）

東歌の本質に関しては、折口は「民謡―国ぶり―として純粋なもの」（「後期王朝の文学」・『日本文学啓蒙』所収　前出）であり、「その本体が恋歌であ」（「万葉集の恋歌」・「婦人公論」第23巻　昭和13年）ると指摘する。さらに、「かけあひ」（後述）という歌の原始的形式から発生したものだと主張する（「歌の発生及びその万葉集における展開」前出）。

そのうえ、昔は東国が「未開の国・疑問の国」（『万葉集辞典』前出）である故、「万葉人の都では、既に、痕跡もなく亡びた民俗・信仰が、東人の間には、尚勢力を持つて居た」（折口信夫「万葉集講義」・「近代詩歌講座」1～5号　大正8年）。そのため、東歌には昔の時代信仰というものがまだ鮮明に残っている。

宮廷詩を中心とした「大歌」に対し、庶民の感情を素直に歌った「小歌」として存在する「国風（くにぶり）」歌、そこから読取れる古い民俗信仰、さらに、「望郷の歌・相聞歌」（『万葉集辞典』前出）としての行役・恋愛要素――堀における『詩経』の学習傾向（国風の民俗学的な解読、恋愛・行役歌への注目）というものは、上述の東歌の性質と自ら軌を一にしていることが明らかである。

そのうえで、折口が唱えた東歌の原始的な形式である「かけあひ」に関しては、次のように解説される。「片歌と片歌の『かけ合ひ』は、神と精霊との問答を信仰的な基盤としながら、歌垣＝祭りの場を中心として神に扮した男性と神に仕える処女との間で行われ、さらに村の男と女の間で行われるようになった」。さらに、「かけあひは神と精霊の対立を基盤としているがゆえに相手の歌を凌駕することを目指し、女性の歌に見られる頓智頓才や歌合を形成する競技精神を生み出した。」（西村亨『折口信夫事典　増補版』平成10年6月）。

このように、歌の起原を古代信仰でとらえる際、折口の主張にはグラネーの「即吟競争」説と類似したところがある。それは、歌の原始的なかたちは問答、唱和、競争の要素が絡んでいることである。堀の折口学学習ノートを見ると、「かけあひ」関連の内容が「古代研究二」ノートなどから見られる（ノートには「抒情詩がまだかけあひ（傍線堀）から脱離せずにいる間」や「短歌でのかけあひ（傍線堀）」などがある）。

一方、「古代研究二」に記録された「歌及び歌物語　三、叙景詩」

の内容が、ほぼそのまま「伊勢物語など　追記」（『文藝』昭和15年6月）の「旅中鎮魂」に関する叙述になっていた。そのことから、ノートは中島昭氏が推測したとおり、「昭和12年から、昭和15年」（「折口信夫受容についての素描」前出）の間の作業だと言えよう。折口の弟子小谷桓によると、折口の『古代研究（三冊）』が堀の座右の書となったのは、昭和12年である（「堀辰雄と折口信夫―私記風に見た堀辰雄の一面―」前出）。そこで、堀はグラネーの「即吟競争」説よりも、先に折口の「かけあひ」に接したと推定する。堀は折口の「かけあひ」説を観念にいれたうえで、自分の傾倒していた折口の主張と類似したグラネーの「即吟競争」に直ちに惹かれたことだろう。堀は鈴木虎雄氏の『支那文学研究』（昭和2年12月 弘文堂書房）を読む際には、著者が主張した『詩経』の「朗誦」起原説に対し、「否」の字を大きく書き込んでいる。その事実からでも、堀が古代歌謡の「かけあひ」・「即吟競争」説にいかに信服していたかが垣間見えよう。

今まで辿ってきたところ、堀の『詩経』をめぐる受容は、東歌と軌を一にしていることが歴然としている。つまり、堀が注目した『詩経』というものは、東歌の性質と相似した部分の、民俗信仰に根ざし、恋愛・行役要素が絡んだ「即吟競争」の「国風」歌である。そこで、堀における『詩経』の受容は、東歌、ないし東歌をとり入れた万葉小説へのアプローチだと捉えることができよう。

しかし、堀が営もうとした「万葉小説」――「（出帆）」から、『詩経』の影響を認めることができるだろうか。以下は「（出帆）」をもって検討する。

四　『詩経』から「（出帆）」に至るまで
――戦争から生れた普遍性のある文学

1　「（出帆）」と『詩経』の行役歌
――防人たちの「生・死・愛」

「（出帆）」はフールス紙（縦21．5×横28）17枚の片面を横長に用い縦書きした未完成小説である。小説のタイトルが付けられず、筑摩全集ではノートの冒頭の二文字を取って「出帆」とした。「（出帆）」は小説としての簡単なあらすじなどを完備するもので、潤色が施されていない小説の構想だとみなすことができよう。

まずは「（出帆）」の概要について触れていく。

天平二年に、諸国から落ちあった防人たちは、難波津から出帆した。防人たちは昼間中島から島へと航海し、晩になると、妻を偲ぶ歌を一斉に歌う。未婚者である乎刀良はその仲間外れであった。ある夕方、乎刀良は遥か彼方の絶壁のうえに立っている一本の樫の木から、自分を見送っている母の姿を見出す。その後、乎刀良は老防人與呂麿と出会い、彼から対馬よりもっと向こうにある「死んだ母達の国」に重なる「みみらくの島」の話を聞く。そんな時、同行の防人荒蟲が送糧船の監督として対馬に赴くことを任命される。乎刀良は自ら荒蟲の身代わりになって出航する。ある朝、絶壁の下に一人の若者の死骸が発見される。

昭和19年12月28日付、葛巻義敏宛書簡に、「この次の仕事（万葉もどきの小説）のことなどぼんやりと考へてゐる　この冬ぢゅうにすこし位手をつけたいものだと思つてゐる」とあることから、「（出帆）」の執筆年代は、「昭和十九年の冬からのち、翌年の二十年」（小久保実「古典ノオトの解説」・『堀辰雄全集　第10巻』昭和40年12月　角川書店）だとされている。

昭和19年末からのち20年頃にかけては、新聞の紙面ではまだ一見華々しい戦果報告が続けられているにもかかわらず、日本は戦争における不利な局面が深刻になり、まもなく敗戦を迎える時期になる。その頃の堀は、軽井沢で疎開し、「毎日新聞をみては、身のしまるやうな切ない思ひで暮らしてゐ」（昭和20年2月5日　丸田少尉宛書簡）た。

一方、そのような時局のなか、日本文壇では、商業文芸誌がほぼ休刊を余儀なくされ、出版業界が廃れ、作家たちが沈黙に陥り、或いは「聖戰」のプロパガンダの役割を担い「ペン部隊」に加わった。

「（出帆）」は上述のような時期に、防人物語として描かれたことが意味深い。当時、「太平洋戦争下では、〝私事を一切顧みず、命を天皇に捧げて尽忠に努める〟という防人像が一般的であったが、これを作り上げ、普及に努めたのが国文学者の佐々木信綱、久松潜一、武田祐吉らである」（小川靖彦「もう一つの防人像」・「文学」平成27年5月）。しかし、注意すべきことに、「（出帆）」では、従来の防人像とはほとんど相反的に描出された「防人」たちが登場する。というのも、「（出帆）」では「大君」の存在がきわめて希薄なものであるからだ。そのかわりに、一見強者である荒蟲は妻偲びで男泣きばかりする。一方、妻を持たない仲間外れの主人公乎刀良は常に望郷の念やまず一途に母を懐かしがる。つまり、堀は「望郷の歌・相聞歌」としての東歌にある国や君主の概念を薄め（小川靖彦氏によると、堀は「（出帆）」初案にある「大君の命令は畏れ多い」であるセリフを、「お上の命令は畏れ多い」に改めた）、そこにある人間の最も普遍的な感情にかかわる愛と離別の要素をのみ小説でクローズアップした。

このように、「（出帆）」の防人たちはただ一人の人間としての普遍的な感情――切ない愛と離別の苦悩――にしか生きていない。小説では防人たちの妻・母偲びを主線とする一方、故郷に残された妻たちの思いが時々物語に絡んでいる。――これらの一連の場面の設定によって、愛と離別からなる悲壮な合奏が奏でられる。それは時代が醸成した多くの悲劇（死と離別）のためのレクイエムである。

ちょうど「（出帆）」の執筆を考えていた昭和19年頃に、堀には以下のような『詩経』学習メモが残されていることが意味深い。

・遠く戦に出て、恐らくは生還の日も期しがたく、愛するものと偕老の契も今は空しくなつたのを悲しむ。（「擊鼓」）
・男が遠く行役に出たあと、女は羊飼ふ仕事を守つて、黄昏牛羊の牧舎に帰るとき、帰らぬ夫の身の上を思つて歌ふ。（「君子于役」）
・行役に出でし身の、時に丘に登つて、故郷の父を思ひ、母を思ひ、兄を思ふ望郷の歌。（「陟岵」）

以上は、蔵書④にある行役歌の解読文を、蔵書①に書き込んだメモである。堀が真剣にメモした『詩経』行役歌での一連の心情が何れ

も「〈出帆〉」に描かれている感情と重なってくる。蔵書④の著者によると、「当時男達は屡ば行役に出て、遠く故郷を離れて久しい日を経た。旅にあるものたちは故里の親を思ひ妻を思ひ、故郷にあるものたちは遠い旅の夫を思ひ子を思つて、それらもろびとの思は、切ない歌となつて彼らの間に唱はれた」（39～40頁）。風雲急を告げる時代のなか、堀はこれらの中国いにしえの切ない思いから、時空を超えた人間の血の温みを感じたのではないだろうか。

昭和19年12月あたりに「次の仕事（万葉もどきの小説）のことなどぼんやりと考へてゐる」（前出）堀の、蔵書④に描かれた「当時民びとの共通の思をあらはし」（蔵書④ 33頁）た一連の行役・恋愛歌との出会いは特筆すべきことである。

2 「〈出帆〉」と折口・グラネー説
――「公的な性格の文学」へ

ところで、「〈出帆〉」における〈防人歌〉がどのように歌われているか。一例を取上げることにする。

その男が
鶴がなく葦邊をさして飛び渡る
と歌ふと、
人々はいつかその男について反歌を一斉に誦するやうになつた（傍線引用者）。
あなたづたづし、ひとりさねれば、
乎刀良は自分の傍らで、荒蟲の泣いてゐるのを見出した。

「〈出帆〉」にある防人たちの歌は、殆んど唱和・合唱のかたちで歌われる。

堀における歌が唱和・合唱するものであるという認識に関しては、折口の「かけあひ」説を経てグラネーの「即吟競争」説に出会った経緯を今まで確認してきた。

ところが、堀は歌の唱和・合唱の性質を生かしたうえで、いかなる文学的効果を獲得しようとしたのか。そのことを分析するには、やはり折口とグラネーの言説に戻る必要があると考えられる。

折口によると、「東歌は、もう一歩すれば民謡となる。恋愛と性欲とが結びついた空想で、個人的経験でなく、その社会全体の経験を表したもので（傍線引用者）」（「歌の発生及びその万葉集における展開」前出）ある。それに対し、グラネーは漢詩の一特徴としての「没人格性の気風」を取上げたうえで、「而してこの没人格性（傍線引用者）たるや、藝術の原始段階に於て、詩が即吟せられた実情そのものの所産なのである。」（『支那古代の祭礼と歌謡』）と主張する。

『詩経』に見られる「没人格性」と、「東歌」の「個人」性のない「社会」性とは、自ら一脈通じるところである。堀が『詩経』国風歌及び東歌に目を向けようとしたのは、即吟・合唱歌としての没人格性・社会性の性質を生かそうとしたことからだろう。確かに、小説では防人たちがみな一つの集団内に生き、共通の感情を歌をもって合唱し、個人の気配が甚だ希薄である。

堀がこのような「没人格性」の文学を築くことによっていかなる目

的に達しようとしたか。堀の弟子中村真一郎よりの書簡では、以下のようなことを語っている。

（前略）つまりヴァレリはラテン文学や支那文学の主流のやうに、甚だ公的な性格の文学だと云ふことです。そして私がさうした公的な文学に、近代文学に見出せない美を見出し、（中略）そこから頂天に達した近代文学からの脱け道が私のために用意されてゐると云ふことを意識して、此れからも当分ロマ人の書いたものを一生懸命読んでやらうと思つてゐます。

中村真一郎より　堀辰雄宛書簡　昭和19年2月22日

（傍線引用者）

このように、私的な臭いがあまりにも隅々に満ち溢れている「近代文学からの脱け道」としての「公的な文学」を、中村真一郎より提示された。「万葉もどきの小説」を考え出す半年くらい前に、その提言が堀の強い共鳴を呼び起こし、何かヒントのようなものを与えただろう。

堀における『詩経』をはじめとする中国古典への関心には、「甚だ公的な文学」であることがかなりの役割を果しただろう。堀が陶淵明を読むにも、わざわざヴァレリーの解説書を頼ること[注2]などがその一傍証にもなる。堀はヴァレリーの「公的」な視線を求めていたに違いない。

古歌を歌う民衆を描く「（出帆）」の方法、そして堀の古典への傾倒もまた、彼らの世界文学への眼差しを閑却したまま問うことはできない。「（出帆）」では、本つ国の固有性に基づきつつ、防人たちに共起する感覚、そのノスタルジアの普遍性に、新しい文学の方法が試されている。（傍線引用者）

渡辺麻実「堀辰雄『出帆』と『万葉集』」

（『日本近代文学』第101集　令和元年11月）

渡辺氏が提起したこの論点は大変興味深い。「共起する感覚」、「普遍性」に「（出帆）」の出発点があったことが言えよう。

（前略）しかし昔のやうに自分の気もちだけを一すぢに歌へなくなりましたやうです　これからは、何か、もつと「自己のうちにある自己を超えた自己」のやうなものを歌はなければならぬ、と考へて居ります

「古代感愛集」にある宗教的に荘厳なものにこのやうに心を向けたがるのも、一つは、現在の自分の心のうちのさういふ相剋のためかも分りません

もう一方では、先生や柳田さんの民俗学研究の根本精神のやうなものを、自分の書くものの上にも生かして行きたいものだと考へて居ります

一つの「物語」が単なる一つの「物語」であるだけでなく、それが「人間性」についても、それと同時に「国民性」についても、深く教へるところのものであらせたいと思ひます（後略）

堀辰雄「『古代感愛集』読後」（『表現』第3号　昭和23年9月）

（傍線引用者）

「昔のやうに自分の気もちだけを一すぢに歌へなくな」った堀が、民俗学から新しい道を辿り着くことに急いだ姿が見られる。近代文学の残された課題に直面する際、民俗の真底に根ざした普遍性のある文学を堀は目指していた。

3 「(出帆)」と折口・グラネー説
――「国民性」のある文学へ

「(出帆)」は「国民性」のある文学に努めた小説である。物語の至るところには折口学に根ざした古代の民俗信仰が写されている。そのうち、もっとも注目したいのは、「(出帆)」は「死んだ母達の国」(「妣の国」)という民俗概念を主題にしていることである。

(前略)永久にノオトのままで終わったこの「(出帆)」の主題は、「海の真昼」と「妣の国」の章にみられる「本つ国に関する恋慕の心である」(『古代研究』民俗学篇Ⅰ)にちがいない。折口信夫は「妣が国」への憧れ心を説明して、「其は異族結婚(えきぞがみい)によく見る悲劇風な結末が、若い心に強く印象した為に、其母の帰つた異族の村を思ひやる心から出たものと、見るのである。かう言つた離縁を目に見た多くの人々の経験の積み重ねは、どうしても行かれぬ国に、値ひ難い母の名を冠らせるのは、当然である。」といっている。

小久保実「古典ノオトの解説」(『堀辰雄全集　第10巻』昭和40年　角川書店)(傍線引用者)

興味深いことに、グラネーが『詩経』について分析する際、同じく「異族結婚」の概念を提起した。彼は『詩経』の国風歌は祭礼の場における異集団間の「和親」から生れた「即吟競争」歌であることを主張する。その「和親」の主題は、婚姻関係を結ぶことである。彼によると、「同一地方的共同社会の異集団の間には、対立が極めて厳烈であつた為、其処に当然異族結婚の必要があり、その異族結婚の法規の故に、自分の近親から離れて未知の異族へ嫁して行かねばならない花嫁の心情程、悲壮なものはなかつた(傍線引用者)」(『支那古代の祭礼と歌謡』)。

ここでもし一つ憶測が許されるならば、祭りの場における異集団間の和親から生れた『詩経』国風歌の発生論に接した堀は、歌謡の歴史的背景になる「悲壮な」「異族結婚」から、折口が説いた「妣が国」に結び付けたのではないか。それが「(出帆)」の主題成立に拍車をかけたように見える。普遍性のある民族伝統というものは、時代や国境を越えても、依然として文学世界で永らえられるだけの存在価値があるだろう。

われ〳〵の祖(オヤ)たちが、まだ、青雲のふる郷を夢みて居た昔から、此話(「妣が国」―引用者注)ははじまる。而も、とんぼ髷を頂に据ゑた祖父・曾祖父(ヒヂヾ)の代まで、萌えては朽ち、絶えては蘖えして、思へば、長い年月を、民族の心の波の畦(ウネ)りに連れて、起伏して来た感情である。開化の光りは、わたつみの胸を、一挙にあさましい干潟とした。併し見よ。そこりに揺るゝなごりには、既に業(スヂ)に、

波の穂うつ明日（アス）の兆しを浮べて居るではないか。

（中略）

心身共に、あらゆる制約で縛られて居る人間の、せめて一歩でも寛ぎたい、一あがきのゆとりでも開きたい、と言ふ解脱に対する惝恍が、藝術の動機の一つだとすれば、異国・異郷に焦るゝ心持ちと似すぎる程に似て居る。過ぎ難い世を、少しでも善くしようと言ふのは、宗教や道徳の為事であつても、凡人の浄土は、今少し手近な処になければならなかつた。（傍点折口、傍線引用者）

折口信夫「妣が國へ・常世へ—異郷意識の起伏」

（「國學院雑誌」第26巻第5号　大正9年5月）

「（出帆）」の腹案が立てられた昭和19年12月頃に、堀はおそらく戦争の悲劇がもたらした夥しい〈死と離別〉を目の前にし、日本という民族およびその国の文学はこれからどこへ行くだろうという不安を抱きながら、民族・国民のための、普遍性や永久性のある文学を作ろうとしたことだろう。そんな時、彼は「民族の心」に根ざす「魂のふるさと」——「妣の国」に辿りついた。時代がもたらした多くの〈死と離別〉から「解脱」する「万人共通の憧れ心をこめた」「凡人の浄土」を、堀は遠い祖々の世代から親しみのあった民族信仰——「妣の国」を以て提供しようとした。そこに堀なりの民族、文学意識をうかがうことができるのではないか。

五　むすび

堀は「めざましい勢いで」（神西清・本稿第一章で引用）中国古典を繙いた果てに、「支那の古い物語でも考へてみよう」（昭和20年8月13日　川端康成宛書簡）と語るまでに至った。そのことは結局一つの仮想にとどまった。しかし、堀蔵書目録に入っている夥しい中国古典の書籍、それに、真剣な学習の跡として残されたノートやメモ類——堀晩年の文学をよりよく理解し、作家晩年の創作意向と可能性を跡付けるためには、それらはきわめて重要な資料だと考えられる。本稿は『詩経』をもってその初歩的な論究を試みた。

堀は戦争中に、敗れた国、多くの国民の死と離別に心を痛め、民族のノスタルジーに根ざした普遍性のある文学を営もうとした。そこで、彼が注目していたのは、古代民族に息づく「即吟競争」歌としての『詩経』の国風恋愛・行役歌であった。

東西の文学の特徴を吸収しながら、古い伝統に根ざした「国民性」のある世界文学を築くことによって、堀は作家として大きく羽ばたこうとした。「詩経」ノートは堀のこのような文学的野望の底に流れている一条の地下水だと言えよう。堀の期待が最後に作品として結実せずに終わったにも関わらず、「（出帆）」は、戦争という特別な時期に、一人の日本人作家が書いた普遍的感動の響く公的文学であるところに、自らその存在意義があると考えられる。そのうえ、作家堀辰雄が今日の我々に示してくれた文学態度そのものからも、多く示唆するものが得られるのではないかと思われる。

と、突然、僕たちの行く手には、一匹の鹿が畑の中から犬に追ひ出されながらもの凄い速さで逃げていつた。そんな小さな葛藤までが、なにか皮肉な現代史の一場面のやうに、僕たちの目に映つた。

堀辰雄「十月」（『婦人公論』昭和18年1～2月）（傍線引用者）

昭和20年6月10日の「毎日新聞」（東京）の紙面に、「我戦争目的正義の大道」を唱えながら、「国民と艱苦を分ち、祖先の遺業を恢弘」というフレーズが大きな標題として掲げられている。堀がそれを読んだかは別として、彼は「皮肉な現代」において切ない思いで生き抜き、「国民」の「艱苦」、「祖先の遺業」を自分なりの考えでわれわれに語ろうとしたのではないだろうか。

＊堀蔵書メモは、堀辰雄文学記念館所蔵の堀旧蔵書の調査に拠る。堀辰雄関係の引用本文（書簡、ノート類を含む）は、すべて筑摩書房の『堀辰雄全集』（昭和52年～55年）に拠る。さらに、引用資料にある旧字は新字に改めた（固有名詞などの特殊な場合を除く）。

注

（1）「（東歌）」ノートは『万葉集（全三冊）』（折口信夫　大正5年　文会堂書店）、『東歌―大伴集読本』（北原白秋・折口信夫編　昭和12年　学芸社）、『万葉集総釈　東歌疏』（昭和11年7月　楽浪書院）を参照したものであり、「東歌抄　万葉集巻十四」は『万葉集（全三冊）』（前出）に拠ることが論文（中島昭『堀辰雄――昭和十年代の文学』前出）に指摘されている。それに加え、「東歌」ノートは『万葉恋愛歌読本』（北原白秋・折口信夫編　昭和12年　学芸社）も参照したことが判明した。

（2）内山知也氏〈「堀辰雄の《支那趣味》」昭和46年5月・『日本近代文学』14号〉によると、堀蔵書 *Commerce*（「論叢」）に収める *Petite préface aux Poésies de Tau Yuan Ming*（「陶淵明詩集に寄せて」）という文章に堀がメモした箇所がある。

＊本稿は大阪市立大学国語国文学会総会（令和元年7月27日）にて口頭発表した内容をもとにしています。ご教示を賜りました先生方に感謝申し上げます。

（りゅう　けん・大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程）